イヌの散歩の実施状況と心理社会的要因の関係
Relationship between Dog Walking and Psychosocial factors among Japanese Dog Owners

1K06A194　　野島　麻実
指導教員　主査　岡浩一朗先生　　副査　中村好男先生

【緒言】

近年、我が国では生活習慣病が国民病とも言われる程蔓延しており、国民の健康に対する意識は年々高まっている。しかしながら、習慣的な運動実施者が３割程度に留まる我が国においては、運動の習慣化を第一に運動指導に取り組む必要があるといえよう。イヌが飼育者に対して散歩を要求することは飼育者のパーソナルサポーターとしての役割を担い、飼育者の身体活動の促進および習慣化につながると予測する。これまでの先行研究では､イヌのサイズ､年齢、飼育頭数が散歩の有無、回数、時間、強度に関与しているかが明らかになっているが、飼育者の心理社会的指標が散歩の実施に関与している可能性も高いと考えられる。飼いイヌがコンパニオン・アニマルとして注目されるようになってきている現代社会において、飼育者の心理社会指標とイヌの散歩の実施状況の関係性を明らかにすることが重要であると思われる。

【目的】

本研究は、質問調査用紙を用いて１週間の散歩の実施状況、飼いイヌの特性およびイヌの飼育者の特性を明らかにし、それらが散歩実施状況に及ぼす影響について検討することを目的とした。

【方法】

埼玉県を中心とした区域のイヌの飼育者を対象に「イヌの散歩に関する実態調査のご協力のお願い」と題した広告を直接配布し、参加の同意を得られた方を調査対象とした。さらに､2008年に早稲田大学所沢キャンパス周辺区域で行われたドッグオーナー健康測定会に参加した男女31名（男性8名、女性23名）のデータを加えた。ます、イヌの散歩状況を明らかとするために１週間の散歩頻度、1 日の散歩回数についての度数（割合）で示し、さらに１週間の散歩頻度、1 日の散歩回数、および 1 週間の総散歩時間の平均値（標準偏差）を算出した。次に３つの飼いイヌの特徴（サイズ、頭数、年齢）別にイヌの散歩状況を度数（割合）および平均値（標準偏差）を算出し、比較した。続いて、散歩実施状況に及ぼす飼育者の心理的社会指標（イヌに対する愛着度、義務感、主観的規範、社会的規範、ソーシャルサポート、セルフ・エフィカシー）を明らかにするため、1 週間の総散歩頻度と心理社会的指標それぞれをピアソンの相関係数を用いて検討した。有意水準5%で統計学的有意と判断した。分析には、SPSS for Windows 14.0J を用いた。

【結果】

平日５日間、休日２日間の計１週間のイヌの散歩頻度平均は5.8日/週であり、1日におけるイヌの散歩回数平均は平均1.7回/日であった。1週間のイヌの総散歩時間平均は361.9分/週であった。イヌのサイズと年齢は、1 週間のイヌの散歩頻度と総散歩時間に影響を及ぼすことが明らかになった。1 週間のイヌの総散歩時間と

愛着度、義務感、主観的規範およびセルフ・エフィカシーとの間には正の相関関係が有意に認められた。

【結論】

本研究の対象の飼育者は、イヌの散歩によって厚生労働省（2006）の推奨する身体活動量の約半分を充足し、この散歩時間にはイヌの飼育者の愛着度、義務感、およびセルフ・エフィカシーが関係しており、イヌによるソーシャルサポートという観点からの影響は小さい可能性があることが示唆された。今後は、本研究でイヌの散歩の量に及ぼすとして調査した因子に加えて、他に考えられる因子、例えば、公園や歩道、草むらなど自宅周辺のイヌの散歩に関連する環境要因についてもさらに総合的に検討を行う必要がある。